

2018年3月4日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「イエスの視点、立ち位置は」

聖書：マルコによる福音書12:35～44

ユダヤの人々はダビデが再臨し、永久に続く王国を再建して下さる、それがユダヤ人のほぼ共通したメシア観であった。ダビデ王は確かに神の助けを受けて一代で王国を打ち立てた。しかしその王国は、僅かな期間、限られた地域に過ぎない。また彼自身完全無欠の英雄であったというわけでもない。

イエスは「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか」と問う。ダビデ自身が詠んだとされる詩編 110 編の言葉を引用し指摘する。イエスは、メシアがダビデの子であるなどということはないと言ったのである。それは言い換えれば、メシアとはダビデが建てた王国を再興するような救い主ではないのだというイエスご自身のメシア観を言い表していると言える。

ダビデとは何者だったのか。確かにユダヤのヒーローではあったが、しかしそれは軍事的ヒーローにすぎない。イエスはダビデをメシアの源と考える立場に物申す。世界制覇、侵略、そのようなものを希望とし、メシア待望と結合させられていることに対し、イエスは明らかに拒否されたのである。

続けて「やもめの献金」物語。ここはよく「献金の勧め」として用いられるが、この物語の後に、13章「神殿の崩壊を予告する」イエスの話が出てくる。神殿はユダヤ民衆の献金によって建てられたもの。その神殿がのちに崩壊するという…何故か？ やもめの家を食物にして建てられた立派な神殿は崩壊すると呪うかのごとく予告しながら、やもめの献金を美しいものとして賞賛するのは何かおかしい。イエスは、確かに全財産を捧げ尽くしたやもめを賞賛している。しかし賞賛の言葉を語りながらも、イエスの心は神殿と祭司たちの食物にされるやもめへの限りない憐れみの気持ちに満たされていたのではないか。同時に貧しいやもめから最後のレプトン銅貨までも絞り取っている神殿と祭司たちへの怒りに満ちていたのではないか？ このやもめはレプトン銅貨2枚しか持っていなかったとすれば、全財産を捧げる以外に仕方がなかったということになる。そういう悲しい現実を抜きにして、私たちはこの物語から美しい献金の精神だけを読み取ることをしてはいないか。

私たちはむしろ多くの宗教が語る献金の勧めをここでイエスから学ぶのでなく、貧しい人々を食物にする人々へのイエスの激しい怒りをこそ、学ばなければならない。教会がより大きくなる事だけに目が行き、社会の不条理に目を伏せ、教会に不利益になるような社会問題に口を閉ざしていく。そのような事が教会で成されるようであれば、それはもう聖書の言う「神殿」と化し、「やもめの家を食物にし」てしまっている教会と言われても仕方

がない。(神谷)